



Title	児童福祉機関におけるトラウマインフォームドなアセスメントに関する研究—尺度作成と心理的介入の検討から
Author(s)	高田, 紗英子
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96193
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（高田紗英子）	
論文題名	児童福祉機関におけるトラウマインフォームドなアセスメントに関する研究—尺度作成と心理的介入の検討から
論文内容の要旨	
<p>本研究は、児童福祉領域におけるトラウマの影響を念頭においたアセスメント＝トラウマインフォームドアセスメント（以下、TIA）とそれに基づく心理的介入についてまとめたものである。小児期からのトラウマ体験は、感情的、行動的、認知的、生理的、対人的な領域にわたって、様々な困難を引き起こし、心身の機能や発達に影響を及ぼす。トラウマが人生に与える広範かつ甚大な影響を考えると、適切なアセスメントから治療につなげることは非常に重要である。しかし、児童・青年のトラウマ症状はその特性から見過ごされたり、周囲からのサポートを得るどころか誤った対応につながることも多い。支援を提供する臨床家にとっても、心の傷に触れるることは容易ではなく、個人がどのようなトラウマを体験したか、そしてそのトラウマがもたらした影響について正確にアセスメントをするためには、トラウマに関する正しい知識や実践態度（トラウマコンピテンシー）が求められる。トラウマの影響を理解したケア＝トラウマインフォームドケア（以下、TIC）はすでに児童福祉分野では普及しつつある枠組みであるが、TIAに関する実践は端緒についたばかりである。そこで本論文では、（1）児童・青年のTIAにまつわる現状と課題を明らかにすること、（2）児童・青年に対してTIAを実践する際のプロセスや課題についてトラウマコンピテンシーの視点で検討すること、（3）児童・青年に対するTIAについて、有効なツールおよび介入方法を確立することを目的とした。これらを達成することにより、包括的かつ効果的なTIAの実施方法およびそれに基づく心理的介入方法を提示し、希望のあるトラウマケアにつなげができると考える。本研究では、TIAの土台となるべき組織のTIC化に必要な要素の抽出（研究1）、児童福祉領域におけるTIAに関する実態調査（研究2）、児童・青年に対するTIAツールの作成（研究3）、児童養護施設入所中の児童・青年の抑うつおよび愛着と親子面会の相互作用に関するアセスメント不足への問題提起（研究4）、そしてTIAに基づく心理的介入の実践（研究5）を行った。本論文は全8章から構成される。</p>	
<p><u>第1章 児童・青年のトラウマ、TIAおよびTICに関する現状と課題の整理</u></p> <p>第1章では、児童・青年のトラウマやTIAおよびTICに関する先行研究を概観し、特に子どものトラウマアセスメントにまつわる問題提起を行った。また、PTSDの有病率やトラウマ症状に関する文化的差異についても言及し、PTSD診断の異文化適応性や臨床的有用性について言及した。あわせて、TICの原則や主要要素についても整理し、TICを機能させるための土壤としてトラウマアセスメントが重要な要素となることを示した。加えて、臨床家のトラウマコンピテンシーについても詳解し、トラウマを体験した人への適切なケアを行うために求められる能力について現状や課題についてまとめた。</p>	
<p><u>第2章 児童福祉機関においてTIC実践を促進するためのトレーニングに関する文献研究（研究1）</u></p> <p>第2章では、児童福祉領域におけるTIC実践の中心と考えられる要素を、組織におけるトレーニングという視点から抽出することを目的とした。文献レビューを行った結果、TICを促進するためのトレーニングはスタッフのトラウマに関する知識、態度、または行動にポジティブな影響を及ぼすことを確認した。一方、TICトレーニングの中に、TIAを取り入れている機関も数多くあるものの、現状では、TIAを用いたトレーニングの効果測定に関する研究は限定期であり、TIAの有効性については質的な検証が必要であること、TICトレーニングの中にTIAに関する知識や実践スキルを組み込むことにより、トラウマに関するスタッフのトラウマに関する知識や認識、そして臨床家のトラウマコンピテンシーをさらに向上させる可能性についても論じた。</p>	
<p><u>第3章 児童福祉領域で働く支援職のトラウマコンピテンシーに関する質問紙調査—知識・態度・実践に関して（研究2）</u></p> <p>第2章で得られた結果をもとに、第3章では児童福祉機関で働く臨床家のトラウマコンピテンシーに関する実態調査</p>	

を行った。まず、対人支援職のトラウマコンピテンシーをはかるため、日本語版KAP-TIPを作成し、児童福祉施設で働く臨床家を対象に、支援者個人のTICに関する知識、信念、態度を測る対人支援サービス従事者用のARTIC-35とあわせて量的調査を行った。対象者数の少なさなど一定の限界はあったものの、日本語版KAP-TIP尺度に関しては中程度以上の内的整合性が確認され、トラウマコンピテンシーを図る尺度としての有用性が示された。また自由記述を分析した結果、トラウマアセスメントを効果的に行うためのSVやトレーニングが不足していること、臨床家に対するトラウマの知識に関する教育やトレーニングの不足により臨床家は知識と実践のギャップを感じやすくなり、トラウマ経験について尋ねることへの消極性につながることを見出した。

第4章 日本語版UCLA PTSD Reaction Index for DSM-5の作成および信頼性・妥当性の検討（研究3）

第4章では、アメリカで開発され、児童・青年のPTSDスクリーニングとして世界各国で使用されてきたDSM-V版UCLA外傷後ストレス障害インデックス（以下、PTSD-RI-5）の日本語版を作成し、トラウマ体験を有する318人の児童・青年を対象にその標準化を目指した。PTSD-RI-5のトラウマ体験およびPTSD症状のスクリーニングツールとしての適性と、PTSD重症度評価への有用性が確認できたことから、PTSD-RI-5は日本での使用に適した信頼性の高い尺度であると結論づけた。

第5章 児童養護施設における親子面会に求められるアセスメントとその意義—抑うつ症状と愛着に関する横断的研究（研究4）

第5章では、児童養護施設に入所している468人の児童・青年を対象に、親との面会交流と子どもの抑うつ症状と愛着得点の相互作用について検討を行った。本研究からは、父親の面会交流が児童・青年の抑うつ症状の増加と有意に関連していること、安定愛着得点が低い子どもは父親の面会があると抑うつ症状が高くなるという結果が示された。面会交流は親子関係維持のための主要な介入と考えられるが、今回の結果からは、愛着形成に問題を抱えているようなケースにおいては、親との面会交流を始める前はもちろん、親子面会のプロセスにおいても慎重なアセスメントを行うことが重要であることが示唆された。

第6章 児童養護施設におけるTIA—入所児童への心理的介入を通して（研究5）

第6章では、第4章で作成したPTSD-RI-5を児童養護施設に入所している児童に適用し、TIAの実施とその後の心理的介入について論じた。結果、TIAは子どもだけでなく、子どもの養育を担うスタッフにとってもトラウマ症状の理解に繋がることが示され、TICの観点から子どもを支援するためには、子どものトラウマ症状を適切にアセスメントすることが不可欠であることが示された。

第7章 TIAおよびTICの実践的展開に向けて—傷つきへの気づきとケアの観点から

第7章では、上述した5つの研究から得られた知見をもとに、傷つき（トラウマ）に気づくための支援としてのTIAやTICに関する総合考察を行った。特に、日本における土着のトラウマケアの一形態として、語り部活動に触れ、トラウマを語ることと語りえぬことをめぐる構造について、村上春樹や宮地尚子の著書から着想を得て議論した。その中で、支援を受ける側（トラウマの当事者）と支援を提供する側（非当事者）のポジショナリティの問題についても触れ、トラウマケアにおける支援者のあり方についても検討した。

第8章 児童・青年に対するTIAおよびTIC実践を行う意義と展望

第8章は総括であり、これまでに提示した5つの研究から得られた知見と課題をまとめ、今後の展望について論じた。その中では、トラウマアセスメントツールの機能として、トラウマの病理性に着目しすぎてしまう危険性についても言及し、アセスメントの過程で児童・青年や養育者の持つ強みやレジリエンスに目を向ける必要性を示した。また、TIAを実施する際には、現在呈している症状のみを“点”で捉えるのではなく、これまでのトラウマ歴や抱えてきた困難に加え、その人なりの強みやレジリエンスにも目を向け、“面”として複合的に個人を捉えることで、TIAから始まるケアの質を格段に向上させることができるのでないかと論じた。トラウマ体験自体はなかったことにはならないが、その重みを変えることはできる。逆境的な体験の悪影響を緩和するために、TIAやTICがあり、TIAやTICをもとに、安心安全な環境が形成され、周囲からのサポートや適切な介入がなされ、それがレジリエンスに結びつき、希望のあるトラウマケアにつながる。そして、TIAやTICを醸成するものとして、臨床家のトラウマコンピテンシーやスキルとしてのセルフケアが機能すると結論づけた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(高田紗英子)	
	(職)
論文審査担当者	氏名
主査	教授
副査	教授
副査	准教授
	野坂祐子
	老松克博
	管生聖子

論文審査の結果の要旨

本研究は、児童福祉領域におけるトラウマの影響を念頭においたアセスメントであるトラウマインフォームドアセスメント（以下、TIA）とそれに基づく心理的介入についてまとめたものである。トラウマの影響を理解したケアであるトラウマインフォームドケア（以下、TIC）はすでに児童福祉分野では普及しつつある枠組みであるが、TIAに関する実践は端緒についたばかりである。本論文では、（1）児童・青年のTIAにまつわる現状と課題を明らかにすること、（2）児童・青年に対するTIAについて有効なツールおよび介入方法を確立すること、（3）児童・青年に対してTIAを実践する際のプロセスや課題についてトラウマコンピテンシーの視点で検討することで、包括的かつ効果的なTIAの実施方法およびそれにに基づく心理的介入方法を提示することを目的とし、TIAの土台となるべき組織のTIC化に必要な要素の抽出（研究1）、児童福祉領域におけるTIAに関する実態調査（研究2）、児童・青年に対するTIAツールの作成（研究3）、児童養護施設入所中の児童・青年の抑うつおよび愛着と親子面会の相互作用に関するアセスメント不足への問題提起（研究4）、そしてTIAに基づく心理的介入の実践（研究5）を行った。

第1章では、児童・青年のトラウマやTIAおよびTICに関する先行研究を概観し、特に子どものトラウマアセスメントにまつわる問題提起を行った。また、PTSDの有病率やトラウマ症状に関する文化的差異についても言及し、PTSD診断の異文化適応性や臨床的有用性について言及した。第2章では、児童福祉領域におけるTIC実践の中心と考えられる要素を、組織におけるトレーニングという視点から抽出することを目的とした。文献レビューを行った結果、TICを促進するためのトレーニングはスタッフのトラウマに関する知識、態度、または行動にポジティブな影響を及ぼすことを確認した。第2章で得られた結果をもとに、第3章では児童福祉機関で働く臨床家のトラウマコンピテンシーに関する実態調査を行った。日本語版KAP-TIPを作成し、児童福祉施設で働く臨床家を対象に、支援者個人のTICに関する知識、信念、態度を測る対人支援サービス従事者用のARTIC-35とあわせて量的調査を行った。日本語版KAP-TIP尺度に関しては中程度以上の内的整合性が確認され、トラウマコンピテンシーを図る尺度としての有用性が示された。第4章では、アメリカで開発され、児童・青年のPTSDスクリーニングとして世界各国で使用されてきたDSM-V版UCLA外傷後ストレス障害インデックス（以下、PTSD-RI-5）の日本語版を作成し、トラウマ体験を有する318人の児童・青年を対象にその標準化を目指した。PTSD-RI-5のトラウマ体験およびPTSD症状のスクリーニングツールとしての適性と、PTSD重症度評価への有用性が確認できたことから、PTSD-RI-5は日本での使用に適した信頼性の高い尺度であると結論づけた。第5章では、児童養護施設に入所している468人の児童・青年を対象に、親との面会交流と子どもの抑うつ症状と愛着得点の相互作用について検討を行った。父親の面会交流が児童・青年の抑うつ症状の増加と有意に関連していること、安定愛着得点が低い子どもは父親の面会があると抑うつ症状が高くなるという結果が示された。第6章では、第4章で作成したPTSD-RI-5を児童養護施設に入所している児童に適用し、TIAの実施とその後の心理的介入について論じた。これらの知見をもとに、第6章ではTIAやTICに関する総合考察を行い、全体総括が第8章でまとめられている。

先行研究で明らかにされているように、日本におけるTIAに関する研究は限られており、国内外のレビューから現状の課題を明確化したうえで、トラウマに関する心理尺度開発と有用性の検討を行ない、児童福祉施設で働く臨床家に対する量的調査、施設入所児童を対象とした量的及び質的調査など多様な研究法を用いた本博士論文は極めて独自性が高いものである。また、心理臨床実践の観点からも高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。